



Title	影印『手縁舟』卷六
Author(s)	
Citation	語文. 1980, 37, p. 23-58
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68667
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

手

繩

舟

六

傳奧利舟

六

第 號

假 通

國事は解りて臣は草
書を以て御内閣に付
さる。筆者御心より
てたゞよがけ六書を此派甚
餘事の如くて少人たゞか
手を代とだへし。其の
あらて寛文八年五月
十四日御内閣に付
みけられし御心也たゞに
やうて擧れ。浦戸乃く少
翁なる御出立ありやうか
手筋ノカハシトシカニ

年嘉慶二十五年九月
うひ山川の事。其の事
聞知して又お急ぎなほ
事本にかかれて御内閣に
持てておこなふ。其の事
不思議が陽子の事。其
事は大般舟十と八十
八所九合といひ集うて着も
止ふ。かく石像の事。而して
紫苑文は極端と見し林倉
と連て成る。又其事は
新進の人故にとて又て詮

道遠乃地也。近い地も乃
あり。かくのまが、かくの様
下れ潮ノトヨリ。かくのまが、かくの
船ノトヨリ。かくのまが、かくの
乃はよ。かくのまが、かくの
かくのまが、かくの南也。
流也。西國乃山の事にかく
かくのまが、伊豆ノ島の萬葉の
事。かくのまが、かくの南也。
紀錄乃事也。かくのまが、良
よ立也。かくのまが、かくの伊志
難波乃浦也。かくの武庫の

奥の山中には
朝夕ありて
やまと人を
うつす者アリて
まゐる人あれば
山浦乃松葉今もあつた
かくわざとひきくわ
らばの或、詩歌と仰或
は連俳アリてやうひひきわ
かくせんとくめゆまやう
あらわす。山浦の裏山

くて今が集まつて
舟船のねぐらで何を
ともかくとばかりす
よりうへん

維特寛文十一年

辛亥之朱律

阿知子顯成

毛氏舟卷第十六

残稿
卷之三

新井や紀崎等の我
新井や新井やうめ我 傷
新井や新井やうめ我 利負
新井や新井やうめ我 布
新井や新井やうめ我 葉
新井や新井やうめ我 一志
新井や新井やうめ我 暴
新井や新井やうめ我 暴
新井や新井やうめ我 久成
新井や新井やうめ我 全休
新井や新井やうめ我 傷
新井や新井やうめ我 傷
新井や新井やうめ我 傷
新井や新井やうめ我 傷

船暮と是れ無也或る場西之
お而能む打高也或る場之
我等也場下の浦に居 鈴
尾ノ一也懸りかく裏方寸
處爲寄縄也場縄 丹
美代ノ日也場縄 丹
毫端也場縄 丹
我等もかづか本を破 象
我の事等も極む可也 犬子
我の事等も極む可也 楠
我の事等も極む可也 楠
我の事等も極む可也 楠
我の事等も極む可也 楠

極朝乃力無也一 我亦日善
物乃多也而也於我而益一六
正而滿多風而也於我而益 善
夏

不而人也淨也我而而益 善
之六清一而也而我而博益 善
水清一而也而我而益 善
為清一而也而我而益 善 神
而清一而也而我而益 善 神
而清一而也而我而益 善 神
我而而而於中其日 宜滿
惠而也泉而万宗其神日 之
而而而水而人也而益 善
而而而水而人也而益 善
而而而水而人也而益 善
而而而水而人也而益 善
秋

而而而水而人也而益 善
而而而水而人也而益 善
而而而水而人也而益 善
而而而水而人也而益 善
而而而水而人也而益 善
而而而水而人也而益 善
冬

國々の萬物を爲す生葉 標榜
後漢書高麗記に云ひ助佐
事也はや残り西ノ島に散成
春國の草木に引寄有る也
之日月には此物付残る博川後
復興其也而不も之を我の日義
爲之我大喜也月舟 案
水打御て之月能残我日 真秀
月也一物也此石我 藤光
鬼頭ノ月也此之月大 横
春國也月也此之月大 横
月也此之月也此之月大 横

是れ恐入甲子ノ年也
元治ノ初夏也未だ成る
其時之ノ月也又未だ成る
其時之ノ月也又未だ成る
此後名參也未だ成る
序ノ今後南也未だ成る
序ノ今後北也未だ成る
序ノ今後東也未だ成る
序ノ今後西也未だ成る
初夏ノ初夏也未だ成る
春也未だ成る初夏也未だ成る
初夏ノ初夏也未だ成る
次第大迄
次第大迄

卷之三

多大廢事事一厚代志乃
博頭成

大坂

素桔や若角代て我弓改也
道連繩也絆也鷦鷯波海博
風也一皮乃服之ん我弓大坂奥
大事に満すうづの我弓大坂一六
篠代乃轟尾也而宿日也
たのむ御是もお次雄我弓日也
手て網も今うみよ我弓日也於
中井至舞田領也我弓日也之
破ノ舞我舞也舞系舞子博利
我弓乃舞系六は乃被か乳博
新弓也スミササギ也我弓日也
古神余也弓乃太刀也我弓日也

かはるにあらわす其の心を
し且た人のねりがまか
せをうかがひむじとてなまく
あらわす

寛文九年三月甲午 松嶽

かはるにあらわす其の心を
し且た人のねりがまか
せをうかがひむじとてなまく
あらわす能詩の筆向ふる
教へておひきいふにあらわす
到へておひきいふにあらわす
圓訓の筆向ふるにあらわす
あらわす筆向ふるにあらわす
乃て筆向ふるにあらわす
種也古の筆向ふるにあらわす
固辞の筆向ふるにあらわす

作者

左

孤猿風窓
清風川苔蘚
二派風芦
花園萬馬
菊田紫園

右

松毬風鈴軒
鳴川空簫
白綱風鴻
中寺風蕉
小川柳橋

百番俳諧句合
一番 元日

左 胜

孤猿風窓
松毬風鈴軒

右

松毬風鈴軒

中寺風蕉
言葉集やくわざくわて 繕松
二番 初芝居

方 拙

清風川苔蘚

トセ太鼓生をうのや初芝居

大

鳴川空簫

老翁のうつむかひ船初芝居

初芝の花もさうやとお被

左乃手は生れへばお業

三番 水掛祝

五番 吉祥餅配

尾持 二活風芦

九 扇 菊田憲則

絶妙か沖中乃水のひ

八 扇 長崎餅配

右 仁綱圓鵠

七 扇 小川柳橋

かく萬方秋翁の水屋也
友達が出来ての水屋也

六 扇 新鶴

四番 美葉

五 扇 花園吉駄

尾 九 扇

花園吉駄

摘要が先はうへんのひ

四 扇 中寺風蕉

右 九 扇

松風圓鵠

摘要が先はうへんのひ

三 扇 春風芭翁

- 七番 猫萬葉
左勝 満月の白雲菊
萬葉の白雲の白月の白雲
右勝 萩の葉萬葉
萬葉の葉の葉の葉の葉
八番 香駒
左勝 二派風声
風の音の音の音の音の音
右勝 中ち風蕉
中ち風の風の風の風の風
九番 海苔
左 花園詩序
花園の詩の序の序の序
右 勝 中ち風蕉
中ち風の風の風の風
十番 防風
左勝 菊園風
風の風の風の風の風
右 小川柳楊
小川の柳の楊の楊の楊

白候主御之八事主防風也

菴人乃者之方之萬麻

十一番 種箭

丸 狩櫛風言

田の出やおま城被毛松毛

太勝 松毛風松

宮博也松乃松毛松毛

十二番 麻箭

丸 ほん葉箭

一毛主御之萬麻

太勝 萬麻

丸 一毛主御之萬麻

十三番 柏杞

丸 二毛圓莖

子毛圓莖也萬麻也萬麻

太勝 小綱風落

摘入也萬麻也萬麻也萬麻

十四番 四革

丸 花園萬麻

丸 一毛主御之萬麻

太勝 中毛萬麻

丸 一毛主御之萬麻

波の音を吹田鳥居

十五番 柳鏡

左 扇 菊田臺灣

泊舟か故ゆれば柳之

右 小川柳橋

釣竿や川の柳之

食すし柳の柳鏡

十六番 鳥翼

左 扇 狐塚風雲

名代の子の風雲の風雲や

右 扇 松風扇

風車の聲か木葉の聲

十七番 旗幡金佛

左

愛人風雲

鐘の音が此の世の音

左 扇 呂派朱蕭

わ縁に可むかひの音

志士の心に可むかひの音

大番 生金佛

左 扇 二派風雲

六方扇と八方扇と二派の風雲

左 扇 亂綱風雲

漫毛の風雲か乱の風雲

六乃湯や氣毬の作參玄徳

一匁玉河うれむ事は方宣揚

十九番 花

サニ番 楠觸

丸勝 花園萬馬

航援風室

ちかくの御手筋の爲め此紙

かでやつむをかくすもかく銅

右 中ち見直

右勝 松原義利

月と花が咲くのと人間死
が咲くのと死んで咲く紙

様あへが多の綱から一筆山
お前へ天下一枚乃是の綱

廿番 楠

廿番 鳥城機

丸勝 菊田雲周

丸勝 楠原雲菊

弓矢をもひづる深し板木火

下なる事はやうやうのまゝ

右 勝 小川柳橋

右 楠の雲菊

是れが越都の雲ノ下ノ下橋

深馬が雪よがりてくわいだき

サニス 梨花
左勝 二層鳳芦
右 紅鳳鷺
金糸也 紫の花
ナシ 蘭坊花
左 和園書院
右 紫蘭
左勝 中の風蕉
えひつねはなを蘭坊花むかづ

之口無事の日は、
アヌヌ 脊端
左 手 菊田清風
右 小川柳橋
アヌヌ 脊端
左 手 菊田清風
右 小川柳橋
アヌヌ 脊端
左 手 菊田清風
右 小川柳橋

よきへやがひのくわんわん

あくやかくわんわん

ナセウ 茄葉

ナガウ 謐毅

ナガウ 謐毅

ナセウ ばくはん

ナセウ ばくはん

ナセウ ばくはん

ナセウ ばくはん

ナセウ ばくはん

ナセウ ばくはん

ナセウ 部

ナセウ 政食鳥

ナセウ 二呂風芦

ナセウ 菊田墨園

ナセウ せきとくまづけ部

ナセウ せきとくまづけ部

ナセウ じ綱風鶴

ナセウ 小川柳橋

ナセウ 村田ちくわひたのやまと

ナセウ 村田ちくわひたのやまと

向左の腰に右の腰を

向左の腰に右の腰を

サ一番 蝶

サ三番 日光葉

左 扇 桃源窟

左 扇 二月風声

右 扇 桃源窟

右 扇 二月風声

右 扇 松風窟

右 扇 松風窟

右 扇 桃源窟

右 扇 二月風声

サ二番 中脇

サ二番 松風窟

左 扇 桃源窟

左 扇 桃源窟

右 扇 桃源窟

右 扇 桃源窟

左 扇 桃源窟

左 扇 桃源窟

右 扇 桃源窟

右 扇 桃源窟

松風閣主人之鴻

端午

荀子卷四

八棟也居不就也此軒乃其

右勝
小竹柳稿

毫の筆

八種のアーチカルクの紙のうち

廿六
甲子

方歸
猶懷堂

卷之三

右
卷之三

卷之三

丁巳年夏月
王之春書

九

卷之二

右勝

卷之三

卷之三

文淵閣
卷之三

卷之三

酒のまき枝より物をゆれ

大陽

「萬葉集」の題

心袖風車　右　柳枝　左　柳枝

十九番　葵田志郎
右　持　根園古馬
十九番　柳枝　右　柳枝
右　中　中　風車

十九番　葵田志郎
右　持　根園古馬
十九番　柳枝　右　柳枝

十九番　風車　右
右　勝　葵田志郎
十九番　柳枝　右　柳枝
右　小川柳枝
十九番　風車　右

四十一番 下野紀
左馬場 牧原風雲
太
下野毛のけで麻乃まくと記
四十二番 百合車
左馬場 沢渡風雲
毛乃萬代の車一百
左
高川紫蘿

萬神風

萬神風

平三萬風

平三萬風

危勝二萬風

危勝二萬風

右小國風

右小國風

右小國風

右小國風

左小國風

左小國風

左小國風

左小國風

四十萬風

四十萬風

危勝二萬風

危勝二萬風

右小國風

右小國風

右小國風

右小國風

右小國風

右小國風

あひや同り一人通さう

甲子年
周易

方
お

徐聞竹書

卷之三

卷

噶西學苑

卷之三

卷之三

平定回疆方略

左勝
二流風

卷之三

七
紅綢鳳鳥

白居易集

卷之三

羅九叢
汗

七

花園書屋

水滸傳

右
中華書局影印

二十一

行草书

辛夷
納涼

方正圖

酒香四溢

右 腳
小川柳 楊

水涼一月之後於白雲院

五十三番 玉奈

かくはくたかの歴史

かくはくをもつてゐる所

辛子歳 桜花季

五十七歳 元月

菊里園

寶鏡山

さくらや根の船と水元

右勝 小川柳橋

太

宝鏡山

春深むとくの雪が残す

心の餘の風流地あらゆる

五十六歳 岁入

みたす 靖姫

さくら園

左

二郎園

冬の雪のよきのいとほほ葉

右勝 桜花季

左

仁綱園鶴

かくはくの雪の春をもと

かくはくの雪をもと

京世人の向ふにあつたもの

京世人の向ふにあつたもの

五十九番 鶴

六十番 補

左 勝 玉圓寺印

左 勝 玉圓寺印

花落がよし車や一ノ山

川むすび川もほくせんか

右 勝 中音圓通

松風の音

花落がよし車や一ノ山

川むすび川もほくせんか

川勝(左)屋(右)也

水乃起(左)波(右)也

六十番 蟻

六十番 床

左 勝 菊田空園

清貧の菊

京乃人(左)也(右)の花

床乃(左)也(右)の花

右 小川柳橋

白(左)川(右)柳

切(左)川(右)柳(左)也(右)

白(左)川(右)柳(左)也(右)

留麻の花の下二番目
六十三番 風仙花
左勝 二番目
島崎の花の下二番目 風仙花
右
紅葉風仙
又やうんの花の下二番目 風仙花
ゆせんの花の下二番目 風仙花
六十番 薙塚
左指 在園書評
ある樹乃様花の下二番目 桂枝根
右 中の風仙
ほの木の花の下二番目 桂枝根

六十番 茄
左
菊留園
さかづて西の秋の赤根
左勝 小川柳橋
又やうんの花の下二番目 桂枝根
六十番 苦參
左指 在園書評
菊様風仙
四乃翁九月月夜一九種
右 松風桂引
留麻の花の下二番目 桂枝根

六十九番 葡萄

六十番 葡萄

過熟葡萄

六十九番 葡萄

左

六十番 葡萄

左

過熟葡萄

本來の葡萄より高級

左

針葉也の葡萄

中熟葡萄

六十番 葡萄

本來の葡萄より高級

六十番 葡萄

七十番 梨桶

左

左

葡萄紫

奥の向か合葉ての葡萄

本來の葡萄より高級

右

右

小川柳

握りの葡萄より高級

本來の葡萄より高級

七十三番 梅實
た勝 梅實風
をもる都也。やうむか
右 松風
左葉の生葉がやうむ
よむ（乃む）むかわす
七十四番 梅燥
た勝 梅燥
をもる都也。やうむか
右 松風
左葉の生葉がやうむ
よむ（乃む）むかわす
七十五番 梅葉
た勝 梅葉
をもる都也。やうむか
右 松葉

七十六番 梅葉
た勝 梅葉
をもる都也。やうむか
右 松葉
左葉の生葉がやうむ
よむ（乃む）むかわす
七十七番 梅葉
た勝 梅葉
をもる都也。やうむか
右 松葉
左葉の生葉がやうむ
よむ（乃む）むかわす
七十八番 梅葉
た勝 梅葉
をもる都也。やうむか
右 松葉
左葉の生葉がやうむ
よむ（乃む）むかわす
七十九番 梅葉
た勝 梅葉
をもる都也。やうむか
右 松葉
左葉の生葉がやうむ
よむ（乃む）むかわす

桜のへんにかわづかのあらわ

かわづかのへんにかわづかのあらわ

七十番 暮秋

七十番 小春

左 桜 菊園

左 桜 清風

りめうすれをきむき

かわづかのへんにかわづかのあらわ

左 小川梅梅

左 梅 梅

寒風やま調ひ一匁林の音

かわづかのへんにかわづかのあらわ

ねげ出で簾を擇てちがはば

かわづかのへんにかわづかのあらわ

七十六番 冬更衣

左 番 神無寺

左 桜 蔷薇風

左 桜 二月風

錦入やかもむかうよあざ

かわづかのへんにかわづかのあらわ

右 ねじねじ

右 ねじねじ

紫のさくやうのとみの木葉衣う

かわづかのへんにかわづかのあらわ

江戸の書院で書いたもの

院中書院の筆

十九番 真子

八十一番 月蓮

右 勝 紫雲宮御

孤高風流

右 風華館の筆

萬葉集の筆

右 風道

孤高風流

右 風華館の筆

萬葉集の筆

右 風華館の筆

萬葉集の筆

十八番 十九番

八十二番 寒草

右 勝

孤高風流

右 風華館の筆

萬葉集の筆

右 勝 小川柳橋

孤高風流

右 勝 小川柳橋

孤高風流

瘦うき下り立て馬鹿人遣せぬる

八十三番 大根

左 二派風芦

川柳や出でゆ出で五大根

右 勝 紅網風路

窓乃かね根さへや大根

志とわらひとよがひと人根

八十四番 纸子

左 勝 紅園や芦

さの力向くがまくへあひ六

右 中奇鳥雀

風をひきぬとゆめがふれ

勢ひ立はれ人限き出せぬ

八十五番 食

左 葡萄園

秋深葉に紅葉の秋が秋か

右 勝 小川桔橘

秋深葉に紅葉の秋が秋か

あまくすくすく小金糞のす

八十六番 炭

左 勝 紫櫻風路

枝繁乃が入却むかひのいの

右 桂風鶯野

さわるる一木の桂の風

二十六日
水

八十七番 火燒

十九勝 菊の花

九十八番 水

九勝 開國

九十八番 火燒

九勝 菊の花

八十八番 水

九勝 二郎

九十八番 火燒

十九勝 菊の花

九十八番 水

九十八番 火燒

二十七日
水

八十九番 水

十九勝 菊の花

九十八番 水

九十八番 菊の花

九十八番 火燒

九十八番 菊の花

九十八番 水

九十八番 菊の花

九十八番 火燒

十九勝 菊の花

九十八番 水

九十八番 火燒

英の國のノリタケを金

かの國のノリタケを金

九十三番 雪

九十三番 雪

方器 橋協風宣

方器 二派風宣

方器 橋協風宣

方器 二派風宣

方器 橋協風宣

方器 二派風宣

九十二番 福教寄

九十二番 福教寄

方器 滋園山葡萄

左
九牛二齒 寒化酒
左 肺 桃園酒
白面
右
川柳橋
酒
左
九牛二齒 神藥
左
流雲風露
右
九牛二齒 煤油
左 肺 二郎酒
右
九牛二齒 桃園酒
左
玉液也松蜜酒
玉液也松蜜酒

古事記の神々

アヒルの神

牛九番 竜首

丸 花園

老の御前

太陽 大きな花

老の御前

白面

丸 桃

大連鷦鷯

太 小川柳橋

大連鷦鷯